市販離乳食の利用度とその栄養学的検討.
鉄欠乏の頻度と発達に及ぼす影響.

清水俊明，新島新一，山城雄一郎[1)]

＜要約＞

鉄欠乏と乳児における可逆的な神経学的発達の異常が欧米において注目されており、我が国においても乳児の栄養法と鉄欠乏との関係、およびその発達に及ぼす影響などについての詳細な検討が必要と考えられる。

本検討において、健常乳幼児においても鉄欠乏が少なからず認められることがわかった。また、鉄剤の投与により血清鉄濃度のすみやかな上昇と神経学的発達の改善傾向が認められた。

今後、市販離乳食と鉄欠乏との関係についても検討を加えていく。

＜見出し語＞

鉄欠乏、乳幼児、神経学的発達、離乳食。

---

1)順天堂大学小児科

<目的>

乳幼児における鉄欠乏の頻度を知りその発達に及ぼす影響を検討する目的で本研究を行った

<方法>

当科外来を受診し、血算および血清鉄濃度の測定を施行された3才以下の乳幼児を対象とし健常児群（高ビリルビン血症のフォロー、アレルギー検査、血液型検査、夜泣き精査などを含む）16例と疾患児群（未熟児、食物アレルギー成長障害、てんかん、染色体異常、各種感染症など）16例とに分けた。

健常児群は男／女：9/7（3カ月～2才8カ月、平均15.1カ月）、疾患児群は男／女：11/5（2カ月～2才8カ月、平均11.9カ月）であった。

鉄欠乏を認めた患児4例では、神経学的発達の評価を行い、インクレミンシロップ（0.5 ml／kg）投与後に発達の再評価を行った。

<結果>

1) 健常児群ではHb値は全例正常範囲内であったが、Feが低値を示す症例が16例中7例（43.7%)に認められた。(Fig.1)

2) 疾患児群ではFeが低値を示す症例が16例中4例（25%)に、Hbが低値を示す症例が8例（50%)に認められた。(Fig.1)

3) Feの低値を認めた児の食餌内容は一定していなかった。

4) 鉄欠乏を示した患児における明らかな神経学的発達の遅れは認められなかった。（Table 1）

5) 鉄剤の投与によりDQが上昇する症例が4例中2例（DQ100 →128%, 98→108%）に認められた。（Table 1）

<考察>

血清鉄濃度の個人差は大きく、健常乳幼児においても鉄欠乏を示す症例が認められた。また鉄欠乏を認めた患児に鉄剤を投与する事により神経学的発達の改善傾向が認められた。

今後、乳児における鉄欠乏と食餌、特に離乳食との関係を調査し、鉄欠乏と神経学的発達異常の関係についてもさらに症例数を増して検討していく。

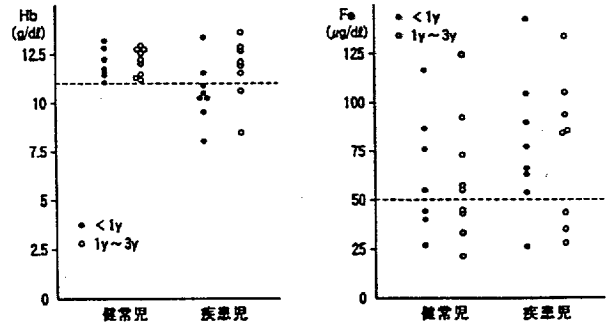

Fig.1 健常乳幼児および疾患乳幼児におけるHbおよびFe濃度

Table 1 鉄欠乏と神経学的発達異常の関係および鉄剤投与の影響

症例	年齢	性	診断	鉄剤投与	Fe (μg/dl)	Hb (g/dl)	DQ (%)
1. R.F.	6m	M	低出生体重児 (34W, 2332g)	(前)	29	10.2	100
				(4W後)	69	11.1	128
2. Y.W.	8m	F	食物アレルギー	(前)	76	12.1	98
				(3W後)	72	—	108
3. S.Y.	1y6m	M	食物アレルギー	(前)	44	—	103
				(5W後)	130	11.6	103
4. A.F.	2y5m	F	成長障害	(前)	34	12.0	—
				(3W後)	107	12.2	120

検索用テキスト　OCR（光学的文字認識）ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

〈要約〉
鉄欠乏と乳児における可逆的な神経学的発達の異常が欧米において注目されており、我が国においても乳児の栄養法と鉄欠乏との関係、およびその発達に及ぼす影響などについての詳細な検討が必要と考えられる。
本検討において、健常乳幼児においても鉄欠乏が少なからず認められることがわかった。
また、鉄剤の投与により血清鉄濃度のすみやかな上昇と神経学的発達の改善傾向が認められた。
今後、市販離乳食と鉄欠乏との関係についても検討を加えていく。